

審査の結果の要旨

氏名 徐 海基

本論文は、中国仏教史上に大きな足跡を残した唐代の仏教者、清涼澄観（738-839）の根本思想を追求した労作である。

澄観は、中国華嚴宗の第四祖とされる。しかしかれは、同時に天台宗や禅宗とも深く関わっており、また中国固有の思想伝統の批判的吸収にも積極的であった。著書・講義録・書簡等も多く残している。これらのために、澄観の思想の全貌を捉えることは容易ではないのである。今日まで、鎌田茂雄『中国華嚴思想史の研究』（1965年、東京大学東洋文化研究所）をはじめ、澄観に論及する研究はかなりの数にのぼるにもかかわらず、いまだに澄観の思想に正面から取り組み、その全体の構造と本質を究明したといえる成果が現れていない理由は、主としてここにあると推測される。

著者は、この点の問題性に早くから着目し、澄観の主著『華嚴経疏』（八十巻本『華嚴経』の注釈）、および『随疏演義鈔』（その復注）の解説と分析を地道に進めてきた。この仕事を踏まえ、上の二注釈書に表れる法界観・唯心観を中心に、主に華嚴宗の伝統に属する人々の当該の思想と比較・検討するという手堅い方法を援用しつつ、果敢に澄観の根本思想の解明を試みたものが本論文である。具体的な成果としては、例えば、澄観の思想の根幹となる法界観に特徴的な三類型が認められること、澄観が「非念」や「無念」を鍵概念として南北両禅の融和的解釈を遂行したことなど、いくつかの新知見も打ち出されている。問題が十分に掘り下げられず、主題の統合的解釈が提示されずに終わっている箇所も散見されるが、少なくとも澄観の世界観の基本構造は、本論文によってほぼ全体的に明らかになったといっておよさう。

本審査委員会は、本論文の学界に対する一定の貢献を認め、結論として、博士（文学）の学位を授与するに価するものと判断する。